

## はじめに

大好きだった会社をなんとなく辞めました。  
今はほどよく生きています。

福岡県の田舎町に生まれ大人しい優等生タイプで育った私は、九州の国立大学に入るといふその地方では普通の目標に疑問を持たないまま高校3年の夏を迎えた。しかし、夏休みに突然東京に行きたい！と思い始め、こつそり東京の私立大学向けの3教科に絞って勉強したが世の中そう甘くなく見事に不合格。ところがそれまでの蓄積がものをいっただのか夏以降まったく勉強しなかった数学や物理が必須の九州大学工学部の合格通知を受け取った。

ここが人生最初の岐路。

おそろおそろ両親に浪人したいと言ってみたが叶うはずもなく東京に行きたいという気持ちを抑え、九州大学工学部に入学した。

ちなみに両親からは生まれてこのかた勉強や進路を強制されたことはないので却って反抗できなかつたというのが正直なところだった。

大学では工学部で学んだが、中途半端に選んだ学科だったので目標の定まらない中途半端な気持ちと東京へのあこがれに悶々とした4年間を過ごした。

ようやく就職の時期になり大学の講座に求人企業のリストが張り出された。企業名や事業内容が書かれたリストには勤務地の欄もあったがほとんどは未定という文字が並んでいた。その中で唯一「東京」と書かれた会社が三菱自動車工業株式会社であった。根っからの自動車マニアではなかったがクルマがある生活がこれからの新しい社会だという読みもあり自動車会社に魅力を感じていた。九州を飛び出し東京に行きたいという思いとともに三菱自動車を迷わず選んだ。

これがこのあと人生の半分近くお世話になる会社との出会い。第2の岐路と言える大きな選択だったのは確かである。

私が会社に入ったのは成田新国際空港が開港し、キャンデイズが普通の女の子に戻った1978年。若い人たちからは想像もできないぐらい大昔だろう。それから今日まで、社会や企業が大きく変化したのは事実だ。同時に働くことへの悩みも同じように変化している。

私は入社すると生産技術本部に配属され、工場の生産技術を担当するエンジニアとして社会人生活をスタートした。

ところが、念願だった東京生活は入社後わずか1年で一旦終了。

その後は、自動車産業のメッカである愛知県で仕事を学び、新しい工場開設のために3年余りのアメリカ駐在、海外で生産するクルマの生産準備や部品会社調査のためヨーロッパやアジア諸国を飛び回った。目の前の仕事に懸命に取り組んでいたせいで、あつという間に年月は流れていた。

そしてあるとき、知らされた人事は青天の霹靂だった。メディアに登場したのもこのころだった。

\*\*\*\*\*

そのとき加来浩一はこう考えたと言っている。

「これで矢面に立つことになる。しかし新型車を手にして矢面に立つのだから、まあいいじゃないか」  
2004年6月のことであった。

加来が三菱自動車の商品開発プロダクト・エグゼクティブに任命されたときである。最も若い48歳であった。

数カ月後に発表発売が計画されている新型車のコルトプラスのみならず、2年前から発売されているコルト・シリーズについて、すべての責任と権限をもつのがプロダクト・エグゼクティブだ。わかりやすく言えばコルト本部長といったところである。……以下略。

(2006年月刊プレイボーイのシリーズ特集)

「男たちのクルマ革命」に紹介された記事の冒頭の一文)

\*\*\*\*\*

思えば、私が三菱自動車時代でもっとも脂がのっていたのはこのころだっただろう。私は裏方に相当する生産分野で育ったのだが、入社から26年後、自動車会社の花形である新型車の開発責任者になっていたのだから。

そんな私は33年3カ月間サラリーマンとして過ごし、55歳にして独立。サラリーマンと独立とどっちが得か、在職時代はそんなことを考えたこともなかった。

しかしふとした瞬間、「退職」という言葉が私を支配したのだった。

現在は、サラリーマンを中退。独立起業し、新しい人生を歩んでいる。

私の名前から人と社会に価値あるサービスを「提供し(加)」「耕し育む(耒)」という使命に気づくこともできた。

独立後、顧問派遣会社に登録し、現在までに顧問契約を結んだ会社はのべ70社以上。派遣会社における活動実績は1万人近い登録者の中でナンバーワンを打ち立てた。かといってサラリーマン時代のような制約された毎日とは無縁の人生。

毎日のスケジューリングの中で第一優先順位はそれぞれの顧問会社との打合せおよび客先とのアポイント。活動実績がナンバーワンということはそれなりに動いているはずなのだが、生活面でも精神面でも、自分自身にとつて負担になることもない。

あとは私のペースでゴルフ、会食、旅行、芸能活動……と、基本的にストレスもなく自分のために自由に時間を使っている。

小さいころなんとなく頭に浮かんでいた。

「かっこいい人になる」

「社長になる」

「スニーカーに乗る」

「テレビに出る」

そんな夢も現実となった。

もちろん今に至るまで順風満帆だったわけではない。数ある失敗を繰り返しながら独立して今に至つ

ている。恥ずかしながら、それもおいおい読んでほしい。

夢や目標を持つて学校を卒業し、それを実現するために1歩1歩前進している、そういう生き方ができている人は大変すばらしいと思う。しかし多くの人は目の前の現実<sup>1</sup>に流され、職場や仕事に悩み、転職や独立をすべきか悩み、そもそも何をしたらいいか悩んでいる……、というのが現実だ。

ましてや、働き方改革、早期退職制度、AI導入……、組織の形も働き方の形も、世の中さえもすさまじい勢いで移り変わる。そんな中で、サラリーマン生活を送りながらもその生き方に疑問を感じながら過ごしている人、目の前に立ちふさがる再就職の壁や独立の苦悩、定年を迎え第2の人生の過ごし方に悶々としている人、またこれからそんな現実が忍び寄ってくると予想している人、きつとたくさんいるのではないかと私は想像した。

自分の将来というものを明確に描けずなんとなく抱いていた夢や希望とも違う道で、なぜ会社生活を33年3カ月間も勤め上げることができたのか。

会社が好きになり、仲間が好きで、定年まで会社のために尽くすことを疑わなかった私がなぜ辞める決心をしたのか。

人生、覚悟する場面はそう多くはなくても、必ず訪れる。いざそのとき、どんな心持ちで覚悟をした

のか。

起業の準備をまったくしないうでなんとなく会社を辞めたにもかかわらず、なぜ楽しい毎日を送ることができているのか、振り返ってみる。

そして少しでも私の経験が、また本書が、多くの人の参考になることを願っている。

加来 浩一